

まろがねをばまづ萩のかたに色どりて、からの羅を淺みどりにしてはれり、それにあしで
にてぬへるなんめりき、

澤に住たづの羽かせに涼しきは君が干とせをあふぎ成べし略○下

〔十訓抄十二〕行成は道風が跡を繼て、めでたき能書なりけり、いまだ殿上人の比、殿上にて扇合と
いふ事有けるに、人々珠玉をかざり、金銀をみがきて我をとらじといとなみあへりけり、彼卿は
くろくぬりたる細ぼねのたけたかきに、黄なるかみはりて、樂府の要文を眞草に打ませて、所々
書て出されたりけるを召て御らんじて、是こそいづれにも勝れたれとて、御文机にをかれけり、

〔中右記〕寛治三年八月廿三日、大后○後冷泉后於宇治有女房扇合、基綱朝臣、予○藤原宗忠爲講師、

〔金葉和歌集三〕太皇太后宮の扇合に、月の心をよめる、
大納言經信

みかさ山みねより出る月影はさほの河せの氷なりけり

太皇太后宮の扇合に、人にかはりてもみちの心をよめる、
源俊賴朝臣

音羽山もみぢちるらしあふさかの關のを川にしきをりかく

〔長秋記〕保延元年五月十七日己丑、女院近習女房殿上人、左右各十餘人、調扇紙可合之由日來云々、
今日有其事、左方坊門殿故關白息女、小因幡美濃光清、大宮少將、少輔男公能朝臣、公道、光忠、光隆、爲盛、藏
人清則、右大炊殿顯能、土佐侍從、小少將紀伊男經宗朝臣、爲通、師仲、爲成、範高、清重、臨期上皇○鳥羽御

幸、右方女房著種々裝束、出自几丁帷、寢殿於南廂、有此事、垂母屋御簾、右方二階上置紙、篋十一、各所
進也、敷龍鬢其上、二階敷唐錦茵、以扇爲様、左方無其設、只進紙不出合、篋或以銀作是、或卷付、或只裏
紙云々、

〔源平盛衰記十二〕主上鳥羽御籠居御歎事

折々ノ御遊所々ノ御幸、御賀ノ儀式ノ目出カリシ、今様朗詠ノ興アリシ事、扇合繪合マデモ忘ル